

.....
 研究ノート

アウグスティヌスの探求における
 聖書と哲学との関係について

——『教師論』についての一考察——

堺 正 憲

アウグスティヌスは、晩年に著わした『再論』(*Retractationes*)の中で、息子アデオダトゥスとの対話の書である『教師論』(*De magistro*)について次のように述べている。「この書物において、人に知識を教える教師は神以外にいないことが、福音書に書かれている『あなたがたの教師はただひとり、キリストである』⁽¹⁾に従って議論され、そして探求され、そして発見されている」⁽²⁾(I, xi)。かれのこの言葉よりして、『教師論』における探求が、先のマタイ福音書の聖句に基き、その知解を目指すものであったことは明らかである。

ところが、われわれが実際に『教師論』を繙く時、そこでは、「しるし」(*signum*)の機能、殊に、しるしとしての「言葉」(*verbum*)の機能が議論され、言葉の機能の分析を通して、われわれが或る「事物」(*res*)について教えられるということが如何なることが明らかにされている。それ故、『教師論』においては、言葉の機能についての哲学的探求が行なわれている、との印象を読者に与える。従って、この探求の最後に、可知的なものについてわれわれに教えるのは、外で語る者ではなくて、内なる人に住むキリストである、と結論される時、われわれは、ここに突然キリストの名が現われることに唐突な感じを持つのである。そしてアウグスティヌスの次の言葉を、何か知ら割り切れない気持で聞くのである。「今や、われわれは、全ての者のただひとりの教師が天に在ますのだから、われわれは地上における誰をもわれわれにとって教師であると言ってはならないと、神的權威によって如何に真実に書かれているかを、信じるだけではなくて、知解することも始めてい

(3)
る」(XIII, 46)。

しかしながら、『教師論』における探求はアウグスティヌス自身の言葉通り、先のマタイ福音書の聖句に強く動機付けられ、その知解を目指すものであったのである。殊に神の「言」(Verbum)について、「教える者」(Magister)としての側面から知解しようとする試みであったと思われる。しかもこの探求を通して、かれ自身の真理探求の方式が確立されたのではあるまいか。それは聖書の言葉に基く、「探求—照明—発見」という方式である。このことを明らかにするために、次に『教師論』全体の探求を概観してみよう。

『教師論』は、アウグスティヌスのアデオダトゥスに対する次の質問から始まる。「われわれが語る時、われわれは何を為し遂げたいことを欲しているか、お前には思われるか⁽⁴⁾」。この問に対し、アデオダトゥスは、「教えること」(docere)か「学ぶこと」(discere)かであると答える。アウグスティヌスは、前者は同意するが、後者は如何にしてかと問う。これに対しては、われわれが質問する(interrogare)場合がそうである、と答えられる。しかし、その場合も、質問する相手に、自分が何を欲しているのかを教えることを欲しているとされる。

では「語ること」が言葉を産み出すことに外ならないとすれば、われわれが、学ぶ者が誰もいないで独りで歌う場合、教えることを欲していると言えるであろうか。これについて、アウグスティヌスは次のように言う。「しかし、私は、実に重要な、想起(commemoratio)による或る種の教えること(docere)があると思う。このことを、われわれの会話において、事柄(res)自身が示すだろう⁽⁵⁾」。ここでかれは「想起」の思想を述べ、「語ること」の目的として、ここに一応「教えること」か、あるいは他の者たちないしはわれわれ自身を「想起させること」(commemorare)かの二つを置き、歌う場合は後者の場合であるという(I, 1)。

また、祈る場合も、われわれは「精神の内奥」(mentis penetralia)で祈ることが命じられており、それは神がわれわれの祈りの言葉によって想起させられたり、教えられたりする必要がないからなのであるが、聖職者が為すように、神ではなくて人々が聞いて、「想起」による或る同意によって神へと上げられるためには響く祈りの言葉が必要であるとされる。また、われわれが黙って言葉を思惟し(cogitare)

内に精神の下で語るにしても、そのような仕方での語りも想起させていることに他ならないのであり、その時言葉が固着している記憶が、言葉を繙くことによって、言葉がその「しるし」である事柄 (res) 自体を精神へともたらしているのである (I, 2)。

さて次に、全ての「言葉」が「しるし」であり、全ての「しるし」が或るものを表示すること (significare) が確認され、言葉が表示するところのものの自体を、言葉なしに示すことについての探求が行なわれる (II, 3—4)。「可視的なもの」(visibilia) について質問された時、それがそばにあれば、それを指によって示す場合が検討される (III, 5)。さらに、止まっている自分が「歩くこととは何か」と尋ねられ、実際に歩いて見せる場合のように、われわれが為し得るものについて、かつ、われわれがそれを為していない時にそれについて尋ねられるならば、われわれは質問の後にそれを為すことによって、しるしによるよりも、むしろ事柄 (res) 自体によって、尋ねる者に、かれが尋ねているものを示すことができる。ただしわれわれが語っている時に、「語ることとは何か」と尋ねられる場合は例外であり、この時には「語ることとは何か」を語ることによって、「語ること」から離れることなく、「語ること」そのものを相手に教えることができる (III, 6)。

ここで「しるし」が表示するものについて尋ねられた場合に、そのものの自体によって示す場合の例が見出されており、先に「語ること」の目的が「教えること」か「想起させること」かであると一応結論されたことと合わせて、われわれが或る事物について示される場合の「しるし」と「事物」との関係についての考察が『教師論』全体の探求の方向となる。

さて「しるし」(signa) と「しるし」ではない「事物」(res) については、次の三つの場合が考えられる。(1)「しるし」によって「しるし」が示される。(2)「しるし」によって「事物」が示される。(3)「事物」によって「事物」が示される。これ以後の議論において、この三つの場合について順に考察される。

「しるし」によって「しるし」が示される場合 (IV, 7—VII, 18)。ここにおいて「言葉」相互の関係が考察され、次に相互に表示し合う「しるし」についてかなり込み入った議論が展開される。しかし結論的には、全く同じものを意味する「しるし」としての《nomen》と《ὄνομα》とが見出される。アウグスティヌスがこの

探求において目指していたものが、《nomen》と《ὄνομα》のような関係を持つ「しるし」を見出すことであったことは確かであるが、このことが『教師論』全体の探求において持つ意義については明らかではない。ただ、ラテン語を話す人が《nomen》と言う時、心に想い浮かべているものと、ギリシア語を話す人が《ὄνομα》と言う時、心に想い浮かべているものとは同じものであり、それ自体はラテン語でもギリシア語でもないものである。このように、音声としてわれわれの外に発せられる以前に、われわれの精神においてある言葉が如何なる性格のものであるかが、ここで考察されているように思われる。

次に「しるし」によって「事物」が示される場合が考察される(Ⅳ, 22—X, 31) まずしるしが聞かれると、われわれの精神 (animus) は、しるしが表示する事物 (res) へと向うことが見出される (Ⅳ, 22—24)。ここで、「他のもののためにあるところのものは何でも、それがそのもののためにあるところのものより価値が低い⁽⁷⁾ということが必然である」という規則が導入され、しるしは事物のためにあるのだから、表示される事物はしるしより価値が高いとされる。しかし《caenum》(汚物) という名前と、この名前が表示するところのものとの間では、このことが成り立たないとされる。しかし《caenum》という名前を発するのは、それが表示するものを、聞手に「気付かせる」(admonere) か「教える」(docere) ためであるから、「教えること」あるいは「気付かせること」自体、ないしは、「教えられること」あるいは「気付かされること」自体は、名前より価値があると考えられる (Ⅳ, 25)。ところで、「言葉」は「語ること」のためにあり、語るのは「教えること」のためであるから、「言葉」よりも「教え」(doctrina) はずっとよい (Ⅳ, 26)。これまでの考察から、「事物の認識」(cognitio rerum) が「事物のしるし」(signa rerum) より優れているとされる⁽⁸⁾ (Ⅳ, 27)。

さてⅣ, 6において、「しるし」なしに、そのもの自体によって示す場合の例が見出されたのであるが、それがここで覆される。その理由は、質問の後に事柄自体を示しても、尋ねた者には事柄自体とその事柄に附帯するものとの見分けができないからである。また「教えること」と「語ること」についても、「教えることとは何か」を教える場合も、表示 (significatio) なしには為され得ないし、「語ること」についても「語り」自体は「しるし」であるから、「しるし」なしに教えられ得る

ものは、まだ全く現われていないとされる (X, 29—30)。「しるし」によって「事物」が示される場合についてのこれまでの考察により、「しるし」から「事物の認識」に至るといふ方向へと議論が進められ、「しるし」なしには何も教えられない、と結論されたのである。ところが、その直後、この結論が覆される。

「事物」によって「事物」が示される場合。これについては X, 32以下で考察され、それとともに「言葉」の機能が明確にされる。まず、ここで、事柄 (res) 自体が示された場合、それを見る者が、その事柄自体を知る程に「洞察的」(intelligens) であれば、かれはその事柄自体によって教えられるとされる。そしてむしろ自身の「しるし」によって学ばれるようなものは何もない、と主張される。というのは、しるしがわれわれに与えられる時、もしそれが如何なる事物のしるしであるかを知らないならば、そのしるしはわれわれに何も教えることはできないし、もし知っているならば、われわれはしるしによって何も学びはしないからである。われわれが或る事物を学ぶのは、その事物を見ることによるのであり、その際われわれは自分の眼に信頼するのであるが、見ることによって何を見るべきかを探求する (quaerere) ために「言葉」に信頼するのである (X, 32—35)。むしろ「事物」が知られて「言葉の認識」(cognitio verborum) も完成されるのであり、言葉が聞かれても言葉は学ばれない。言葉がもたらされる時、われわれは、それらが何を表示しているかを知っているか、知らないかである。もし知っているならば、学ぶ (discere) よりも、むしろ想起させられる (commemorari) のであり、もし知らないならば、想起させられるのではなくて、探求すること (quaerere) へと気付かされる (admoneri) のである (X, 36)。

ここで、アウグスティヌスの「想起」の意味が明らかになる。かれにおける「想起」とは、既に知られている事物 (res) についての想起なのである。未知の事物については、それへの探求へと言葉によって気付かされるのである。アウグスティヌスは、既知の事物については言葉によって想起させられることの説明として、ダニエル書 3 章の三人の若者の物語をわれわれが学ぶ場合について述べる。そして「知ること」と「信じること」との相違に関連して、イザヤ書 7: 9 の「あなたがたは信じなければ、知解しないだろう」という聖句が引用され、⁽⁹⁾ 知っていないものについて信じることの有益性が述べられる (X, 37)。

次にアウグスティヌスは、われわれが知解するところのものについて、次のように言う。「われわれが知解するところの全体について、われわれは、外で大声を上げて語っている者にはなくて、内で精神自身を見守っている真理に相談するのであり、恐らくわれわれは言葉によって相談するようにと気付かされたのである。ところで相談されるその方が教えるのであり、この方は、内なる人に住むと言われていたキリスト、すなわち神の不変にして永遠の知恵なのである。事実、全ての理性的魂は、その知恵に相談するのであるが、しかし、固有の悪しきないし善き意志に従って把握することができる程度だけ各々の者にそれは開示される」(Ⅷ, 38)。ここで、突然、キリストの名が現われる。このキリストは、われわれの精神を見守っている神の不変にして永遠の知恵である。この内なるキリストがわれわれに教えると言われる。この内なるキリストについて述べるに当り、アウグスティヌスは、ヨハネ福音書14：6、エペソ書3：17、コリント前書1：24、イザヤ書9：6などの聖書の箇所を念頭に置いていると思われる。このように、これまでの探求がこの内なるキリストの発見を目指すものであり、しかも、この探求が聖書の言葉に基礎を持つものであることが明らかとなる。またアウグスティヌスは、真理探求における探求者の意志を問題としており、「教える者」としての内なる真理と、われわれの精神との関係が、極めて人格的なものとして捉えられている。

ところで「可感的なもの」についてわれわれが尋ねられる場合、そのものがそばにあればそのものについて語り、尋ねた者はそのものを見ることによって学ぶ。しかし、かつて感知されたものについて尋ねられ、それがそばになければ、われわれは記憶の中にあるその事物の似像(imagines)を語るものであり、⁽¹¹⁾聞く者も、それらのものをかつて感知しておれば、自分が持っていたその事物の似像によって再認する(recognoscere)のである(Ⅷ, 39)。これに対して、「可知的なもの」については、われわれは真理の内なる光の中で、それらのものを見ながら語るものであり、⁽¹²⁾閑手も自身の隠された単純な眼によって見るならば、それらのものを自身の観照(contemplatio)によって知るのであり、われわれの言葉によって知るのではない(Ⅷ, 40)。それ故、地上の教師が教え(doctrina)を言葉によって解き明かす場合も、生徒たちは、内なる真理を能力に応じて見ながら考察し、そして学ぶのである。しかし語る者の注意の促しの後に、直ちにかれらは内に学ぶので、自分たちは

注意を促した者によって外で学んだと思ひ、そうでない者を誤って教師と呼ぶのである (XIII, 45)。

これまでの考察によって言葉の機能と役割とが明らかにされ、マタイ福音書23: 8—10の聖句が、神的權威によって如何に真実に書かれているかを、信じるだけではなくて、知解することも始めている、と述べられる (XIII, 46)。

以上で『教師論』全体の探求を概観したが、この議論の始めに、「われわれが語る」ことの目的として一応見出された「教えること」と「想起させること」とは、探求の過程で否定ないし修正されることになった。「語ること」とは、言葉が発することであるから、言葉の機能の分析が行なわれ、言葉の機能として、未知の事物については、それへの探求へと気付かせ、既知の事物については、それについて再認させるのである。前者において、可知的なものの認識に関して、教える者としての内なるキリストが見出され、そこに照明説が述べられる。それと同時に、後者において、アウグスティヌスの「想起」の意味が明確にされる。

アウグスティヌスが『教師論』の探求を始めるに当たり、「想起」による或る種の「教えること」がある、と述べていることは既に見たが、この時点においては、かれは、魂の先在を前提した上での「想起」の思想を述べているようにも思われる。しかし『教師論』の探求を通して結論的に述べられる「想起」は、この世の生において、経験を通して既に知られていたものを再認するという意味での「想起」である。従って『教師論』の探求を始める時点でのアウグスティヌスの「想起」の思想と、この探求を終えた時点でのかれの「想起」についての考えとの間に、変化が生じていると見做すことが許されるとすれば、この変化は、『教師論』の探求の中で真理探求の方式として、言葉に促されての「探求—照明—発見」という方式が確立されるに応じて生じたものであると言えるのではあるまいか。『教師論』の後に、かれの真理探求が「対話」によるよりもむしろ聖書の言葉に基いて進められるのも、かれが司牧の職についたことのみ起因するものではないかも知れない。

ところで『教師論』において言葉の機能についての議論が為されたのは、「語ること」と「教えること」との関係を示しようとする動機からである。しかし何故アウグスティヌスは、「語ること」と「教えること」との関係を示しよ

うとしたのであろうか。それには、何か必然的な動機があったのであろうか。このことについて、『告白録』Ⅷ, i, 1からix, 11までの記述は、示唆に富んでいる。そこにおいてアウグスティヌスは、創世記冒頭の「始めに神は天地を造られた」という聖句の知解を目指し、「神が語る」ということについて、すなわち神の「言」(Verbum)についての考察を行なっている。そして神の言の性格として、世界の創造に関わる面と、われわれに真理を教えるという面とが述べられている。

ヨハネ福音書の冒頭には次のように記されている。「初めに、御言があった。そして御言は神のもとにあった。そして御言は神であった。この御言は、初めに神のもとにあった。全てのものは、この御言によって造られた。そして造られたもので、この御言なしに造られたものは何もなかった」(1:1-3)。ここで永遠の神の御子キリストが御言(Verbum)と呼ばれている。また、創世記においては、万物の創造に際し、神が「…あれ」と言われた、と記されている。しかし神が語るのは、われわれの耳に響く音声としての言葉によるのではなく、神の御言(Verbum)において、全てのことが同時にしかも永遠に語られるのであり、この御言において全てのものは造られたのである。アウグスティヌスが「創造」という観点から「御言」について考察する場合、先のヨハネ福音書の記事と創世記の記事に強く動機付けられている。

しかし、アウグスティヌスが『教師論』において考察しているのは、世界の創造に関わる御言の側面ではなくて、この同じ御言が、われわれに真理を教えるという側面である。この探求の強力な動機となっているものは、ヨハネ福音書の冒頭の記事と、マタイ福音書の「あなたがたの教師はただひとり、キリストである」(23:10)という聖句であると思われる。この二つの聖書の箇所に基づき、「御言が教える」ということ、すなわち「神が語り、神が教える」ということの知解を目指して探求を始めたと思われる。また、その際、先にも述べられたように、ヨハネ福音書14:6、エペソ書3:17、コリント前書1:24、イザヤ書9:6などの聖句が探求の手懸となっていると思われる。『教師論』の始めに「われわれが語る」ことが何を引き起すことを意図するものであるのか考察されたのは、真にわれわれに教えるのは、われわれの精神の内に語り給う神であるということが明らかにされるための伏線であったと思われる。

今やわれわれは、一見言葉の機能についての哲学的議論と思われた『教師論』における探求が、聖書の言葉に基いて「御言」(Verbum)の知解を目指すものであったことを知るのである。アウグスティヌスはこの探求の中で、これまで自分をいつも導いて来た者が「教える者」としての内なるキリストであったことを明確に見出したのである。その意味でアウグスティヌスの照明説は、かれの信仰体験を理論的に説明するためのものであると言えよう。これ以後アウグスティヌスはこの内なるキリストに導かれ、教えられながら、聖書の言葉に基いて真理の探求を進めることになるであろう。

註

- (1) マタイ福音書23:10
- (2) *Retractationes* I, xi. In quo disputatur et quaeritur et invenitur magistrum non esse, qui docet hominem scientiam, nisi deum secundum illud etiam, quod in evangelio scriptum est: unus est magister vester Christus.
- (3) *De magistro* XIII, 46. ... ut iam non crederemus tantum, sed etiam intellegere inciperemus, quam vere scriptum est auctoritate divina, ne nobis quemquam magistrum dicamus in terris, quod unus omnium magister in caelis sit.
- (4) *Ibid.*, I, 1. Quid tibi videmur efficere velle, cum loquimur?
- (5) *Ibid.*, At ego puto esse quoddam genus docendi per commemorationem, magnum sane, quod in hac nostra sermocinatione res ipsa indicabit.
- (6) マタイ福音書6:6についてのアウグスティヌスの解釈。
- (7) *De magistro* IX, 25. Quicquid enim propter aliud est, vilius sit necesse est quam id, propter quod est.
- (8) アウグスティヌスにおいては、しるしが表示する *res* について、可感的な *res* の場合でも、それが「何であるか」という知性認識の場において問題となっているのは、個々の事例としての可感的な *res* ではなくて、可知的な *res* であると考えられる。
- (9) イザヤ書7:9 Nisi credideritis, non intellegitis.
- (10) *De magistro* XI, 38. De universis autem, quae intellegimus, non loquentem, qui personat foris, sed intus ipsi menti praesidentem consulimus veritatem, verbis fortasse ut consulamus admoniti. Ille autem, qui consu-

litur, docet, qui in interiore homine habitare dictus est Christus, id est incommutabilis dei atque sempiterna sapientia. Quam quidem omnis rationalis anima consulit, sed tantum cuique panditur, quantum capere propter propriam sive malam sive bonam voluntatem potest.

(11) 可感的な *res* について、それが「何であるか」という知性認識の場において問題になる *res* と、記憶の中にある *imagines* との関係が一つの問題である。

(12) 真理の内なる光の中でわれわれが可知的な *res* を見る時、われわれは学ぶのであるが、同時に、それによってわれわれが探求へと促されたところのしるしの意味をも知るのである。言わば、しるしがわれわれにとって真に *res* を表示するしるしとなるのも、この照明の「場」においてなのである。

※テキストとしては *Corpus Scriptorum Ecclesiasticorum Latinorum* を用い、章及び節の区分はこれに従った。